

1955
1月19日、サイモン・ラトルはリヴァプールに生まれた。当初はクラシックではなくジャズに影響を受ける。リズム感が強く、最初に買ったドラムセットは壊すまで叩いた。マーゴサイド青少年オーケストラのリハーサルを聴いた際も、彼は指揮者ではなく、ティンパニを叩く少年に特に魅了されている。

1966
20世紀のクラシック作品のレコードを聴くことが大好きな姉がいて、母親に楽譜の読み方を教わった。この年、ハウス・ラティで日曜コンサートを主催し、「Music for Frustrated Conductors(イライラした指揮者のための音楽)」シリーズのレコーディングのために、初めて指揮棒を手にするのである。

1970
ロンドンの王立音楽院でピアノ、打楽器、指揮を学ぶ。

1971-1974
ボーンマス交響楽団およびシンフォニエッタのアシスタント指揮者を務める。

1974-1977
BBCスコティッシュ交響楽団およびロイヤルリヴァプール交響楽団の首席アシスタントを務める。

1977-1980
バーミンガム市交響楽団の首席指揮者を務める。

1980-1998
女王から「ナイト・バチエラー」の称号を授与される。また同年、3,889人の演奏家が参加したバーミンガム市交響楽団のコンサートで「最も多くの奏者が参加したオーケストラ演奏」としての世界記録を打ち立てた。同年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者兼芸術監督に就任。以来、2018年まで16年間にわたりベルリン・フィルを率いた。これはマリス・ヤンソンスがバイエルン放送交響楽団(以下BRSO)に在籍していたのと同じ期間である。

2002
ロンドン交響楽団首席指揮者を務める。

2002
音楽の中にある永久不滅の精神：コロナ禍のさなか、2021年1月3日にサイモン・ラトルはBRSOとの契約にサインをした。2023/24シーズンから、亡きマリス・ヤンソンスの後任者として楽団を率いることを決意したのだ。この時代の転換期を、ラトルは次のように語っている。「人はやって来ては去るが、精神は残る。」

1949
7月1日にBRSOが設立され、1960年まで伝説的なブルックナーの大家、オイゲン・ヨッフムが礎を築き上げた。1955年、ラトル誕生の年にBRSOは初のコンサートツアーを行う。この海外ツアーがのちのオーケストラの世界的名声につながった、とヨッフムは語っている。

1961-1979
ラファエル・クーベリックがBRSOを18年間率いる - これは首席指揮者としての最長記録である。

1970
リヴァプールにおいて、BRSOがクーベリックの指揮でベートーヴェン交響曲第9番を演奏。その客席にサイモン・ラトルがいた。このコンサートは当時15歳の少年にとって指標となる。同年、彼は初めて交響楽団を指揮する。その活動に対する情熱はリヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団の音楽家の知るところとなり、ラトルはリヴァプール・フィルの団員や音楽監督から指揮のアドバイスを受けるようになる。デイリー・テレグラフ紙は「サーカスリングのような雰囲気」と称し、彼の偉大な未来を予告している。

1981
キリル・コンドラシンが首席指揮者に選出されるが、就任前に急逝。

1983-1992
情熱的で、愛想が良く、気取らず卓越した人物。「紳士的な指揮者」として有名だったサー・コリン・デイヴィスの時代。

1986
ハイドンのオラトリオ「天地創造」は、ウィーンでの初演から2年後の1801年にバイエルン州オットーボレンで初演され、その後ハイドンの没年1809年にも再演された。この曲は1946年、同地で第二次大戦後に演奏された最初の曲でもある。1986年には、レナード・バーンスタイン指揮BRSOによって演奏されたことも人々の記憶に残っている。2023年、BRSOの首席指揮者に就任したサイモン・ラトルはこれらの歴史に敬意を表して、オットーボレンでこのオラトリオを演奏した。

1993-2003
ロリン・マゼールがその手腕によってBRSOの音楽的能力を飛躍的に発展させた時代。

2003-2019
「彼らは全ての演奏会を最後のコンサートであるかのように演奏する。指揮者である私にとってはまるでロールスロイスに乗っているようなものだ。このオーケストラは本当に何でもできるんだ」 - マリス・ヤンソンス。

2002
最初の出会ってから40年後、サイモン・ラトルが初めてBRSOの前に立った。当時からのメンバーはほんのひと握り。彼らはラトルが愛するシューマンの「楽園とペリ」を演奏し、ラトルはクーベリックが築き上げた精神と音をオーケストラから感じた。

オーストリアの漫画家ニコラス・マーラーはロミー・シュナイダーやトーマス・ベルンハルトなどの要人たちを、アイコニックなスタイルで描くのが好きな作家だ。サイモン・ラトルを描く際には、フランツ・カフカ風に取り組んだという。

イラスト：Nicolas Mahler